

現地通信

東北タイ農村の「屋敷地共住 集団」の実態に触れて

舟 橋 和 夫

昭和56年7月から6カ月間、私は東北タイのドーン・デーン・グ村調査に参加した。ドーン・デーン・グ村とは、京都大学東南アジア研究センターの水野浩一教授が1964年に単身、長期の定着調査をされた村のことである。今回の調査の特徴は、人文・社会・自然科学者による共同調査という意味で学際的、日本・タイ両国研究者の共同という点で国際的であり、また研究者の多くが主にその村に焦点をあてて、長期にわたり1カ村に定着した調査である点では集約的なものである。それは主に農地の全筆調査、村の全戸調査、6戸のサンプル農家でのデイリー調査などを主軸に展開された。

私の主な役割は、村の全戸176戸に調査票をもって訪問・インタビューする調査（口羽益生、プラサート・ヤムクリフング、武邑尚彦の各氏との共同調査）と、サンプル農家1戸に毎夜出かけていき、その日の生活行動を聴き取ることにあった。これらの調査を昼夜にわたって行うため、夕食時のだんらん抜きの、かなり厳しいスケジュールとなった。

私のサンプル農家の世帯主は年老いたポー（父の意）である。名と姓はブンミー・チャイチャムといい、低めの背丈に、やせ型で、口数の少ない、温厚で円満な老人である。いかにもポーと親しみを込めて呼ぶにふさわしい老人である。話をしていると、突然まったく関係のない話題を平気な顔でいって周りの人をよく驚かす。そんなポーがいつも同じ場所に座っていて、私を迎えてくれた。はじめて訪問した時も、帰る前の別れの挨拶の時も、彼はまったく同じ場所に座っていた。

彼の家の入口の階段を上がって向きを逆にする、と、板張りのベランダがある。ベランダのほぼ中央に柱があり、柱の周りには1、2冊の古びた本や客用のタバコ盆、それに着替え用の上着と昼寝用の枕

が無雑作に置かれている。そこがポーの座る場所である。



（左から定位置のポー、通訳のタナパン嬢、末娘とふたりの子ども）

ベランダに続いて、貧弱な食器棚のある食堂兼台所がある。そこはベランダより一段低くなっている。ベランダに腰かけて台所側に足をなげ出すと、座り心地は満点である。ここにポーの末娘の同居夫婦と、隣の別棟に住んでいる長女の夫婦と、その子供たちが毎日座る。あまり広くないところで、毎夜ポーの座席と2組の娘夫婦家族が座る座席の間に手編みのゴザが敷かれ、大学を卒業したばかりの通訳のタナパン嬢と私の席が用意される。私と通訳とがポーの親子と話していると、毎夜のごとく近所の人ややってきて対話に加わり、狭い場所を隙間のないほど埋めてしまう。

ところで、当初の調査予定ではポーと同居の末娘の家族の世帯のみ1戸をサンプル農家として選んでいた。しかし、結果的にはポーの世帯とポーの長女の世帯の2世帯を調査することになってしまった。

私たちの聴取りはきまって次のような形で行われた。私たちがサンプルのポーの家族に次々といろんなことを問いかけていくと、周りの見物客は興

味をもって、耳をそばだてる。変な質問と回答にはどっと爆笑が起こる。ポーの世帯員への質問がすべて終るころ、長女夫婦は次の質問が自分たちの方に回ってくるのを息を殺して待っている。その感じがわれわれにも分かるほどである。そこで質問をやめれば、彼らの期待を裏切ることになる。ついつい長女夫婦にも質問することになる。こんなことで、毎夜2世帯の調査をすることになってしまった。

ポーは70才である。同居している末娘夫婦にはふたりの子供がおり、このほかに22才になるポーの末っ子の未婚の息子が同居している。ポーは水田20ライ(約3.2ha)を所有し、野良仕事がなくとも毎日のように水田に出かけるのが彼の日課である。末娘の夫は自転車で約30分かかる近くの町、ター・プラのコカ・コーラ会社に勤務し、家では田仕事を手伝う。末娘は主に家にいて、3才と1才の娘の世話と家事を行う。末っ子は近くの東北農業センターに勤めていたが、そこをやめて現在は野良仕事を手伝いながら求職中である。

長女夫婦はポーの世帯から2年前に独立して別居したが、その時、ポーから水田11ライ(約1.8ha)と屋敷地を分割・相続している。夫は農業、漁業、大工とさまざまな仕事に積極的に携わっている。彼には13才の息子と、11才と8才の娘がいるが、妻は専ら野良仕事にあたり、野良仕事を休む時には、非常に狭い菜園(約4a)でとれたトゥガラシ、ナス、タケノコなど各種の少量の野菜や、夫が池でとった魚を、コーン・ケーンの市場に売りに行く。市場での収入はおおよそ60バーツ(約600円)である。往復のミニ・バス代10バーツ(約100円)を差し引くと、約50バーツ(約500円)が手元に残る。

このポーと長女の2世帯は日常まるでひとつの世帯のごとく行動する。水野教授はこのような世帯間の結びつきをとらえて屋敷地共住集団と名づけ、その共同の特徴は「ヘッド・ナム・カン、キン・ナム・カン」(ともに作り、ともに食う)にあるとされている。つまり、生産と消費の共同がこのように行われているというのである。この点について、もう少し具体的に触れてみよう。

稲作は両世帯にとって重要な生産活動のひとつである。すでに述べたように、ポーは20ライの水田を所有し、長女夫婦に分割・相続された水田は11ライ

で、両者は明確に区分されている。しかし、両者の境界にはその両端に杭が打ち込まれているのみであり、分割前の水田と何らかわらない。つまり、所有権のみが移動した状態である。種粃の確保、苗代作り、田植え、苗の植えかえ、水田の見回り、稲刈り、脱穀、運搬など一連の農作業も、両世帯の分割前の水田をひとつの単位として、2世帯が一緒になって作業にあたる。たとえば、稲刈りはポーの世帯員と長女夫婦の世帯員すべてが野良に出て、両世帯の水田をともに刈取り可能なところから順次刈り取っていくというやり方をとる。刈り取られた稲はひとつの脱穀場に運ばれ、主に男手によって脱穀される。脱穀がすむと、粃米は袋詰めになれ、その日のうちに手押し車に乗せられ屋敷まで運ばれる。しかし、このようにして収穫された粃米は、米倉に運び込まれる際に2世帯に折半されて、ポー所有の米倉の中で別々にバラ積みになされて保管される。両者の水田面積が2:1であるにもかかわらず、粃米は2等分される。

粃米はポーの世帯と長女の世帯が必要に応じて別個に米倉から取り出し、村の精米所で精米して消費する。本年のように、昨年の洪水による不作のために自家消費米が不足する場合には、米の購入は世帯別に行われる。3食の食事のなかで、ポーと長女の両世帯が通常食事をともにするのは、水田の仕事の関係上、出小屋で朝食と昼食をとる時のみであり、その他の場合は別々に食事をする。出小屋での食卓の中央を飾るのはおかずである。おかずは長女か末娘が、水田の近くでとれる野の草などを集めてきて、簡単に料理したものである。それに水田で娘の夫たちによって捕まえられた田ガニや、池でとれた魚の料理がある時もある。それを食卓を囲む全員が文字どおり手を伸ばして食べる。しかし、主食であるモチ米は、両世帯がそれぞれ肩にかけて持参した蒸したものを、籐で編んだ米びつから取り出して、球状にして口に運ぶ。

このように、ヘッド・ナム・カン、キン・ナム・カンといっても、その実際の内容にはかなり複雑でデリケートなところがある。こうしたデリケートな部分をどのように解釈・整理すればよいのか。これが目下私を悩ませている問題のひとつである。(京都女子大学助教授)